



# 時間強盜と一



千職丈二

## 第一章

---

この世界には五つの大陸がある。南北アメリカ大陸、アフリカ大陸、オーストラシア大陸、そして、この物語の舞台となるユーラリア大陸である。ユーラリア大陸は世界で一番大きな大陸であり、ロイヤ、ゴブリンキングダム、そして、ローア帝国が存在している。

舞台はユーラリア大陸の西に広がっているローア帝国の小さな港町である。

この町の港側にある関門は普段から貿易船の乗組員くらいしか通らない。決して強大で強固であるとまでは言い切ることができないだろうが、規模が小さいと言われる程度の力の入れ方はされていない。ローア帝国は国防に対して決して手を抜かない国なのである。しかし、手を抜いていないとしても、限界というものは存在する。ここが辺境の地であるということに変わりはないのである。自然と警備が薄くなってしまふものである。

ザーザー、と静かな波の音が聞こえてくる。ほとんどの人が穏やかな気持ちになるだろう。しかし、すぐ近くに野生の獣が生活している密林が少しだけ広がっている。今は猛獣の気配がないので、多くの警備兵の緊張感は薄れているのであるが、その中に一人だけ何かよくわからないが、嫌な緊張感を持ってしまっている一平卒の警備兵がいた。他に不吉な様子がないのであるが、鳥が、カアカア、と鳴いているのである。

嫌な予感がするなあ、と思っていた時だった。展望台から無線が入る。

「中型の野鳥が町に入りそうである。撃墜せよ」

彼はそれに無線で応えた。

「了解」

腰に付けているレーザー銃を手にとって構えた。これは片手で扱うことができる持ち運びに便利なものである。これ以上の威力や大きさのものはまだ支給をしてもらえないような等級ではないので、持っていない。

どうやら結構な大きさの野鳥のようである。まだ姿を見ることができていないが、バサ、バサ、という羽の音で警戒を強めていた。

警備兵のいるちょうど関門の入り口にあたる場所には砂地の広場がある。小規模な密林からこの広場へと出現して来た時に初めてその姿を視認することができるみたいであった。

無線で上官が叫んだ。

「広場に出るぞ。撃て！」

警備兵はグッとレーザー銃を強く握りしめる。

「ギャアア！」

雄叫びと共にあと少し大きければ怪獣類となるだろう鷹のような鳥が警備兵の方へと向かって飛んでいく。

彼は狙いを頭に定めて、レーザー銃を撃った。

しかし、方向転換をされ、全然違うところへとレーザーは外れて、野鳥が警備兵へと襲いかかっていく。

「う、うわあああ！」

彼は、今度こそ、気が付いたら死んでいるかもしれない、いや、死んだら気が付くこともでき

ないんだろうか……？ などと走馬灯のように考えを巡らせていたが――

ピューン、と関門の上からレーザーが飛んできた。

それは鳥の頭を焼き貫き、さっきまで凄いい勢いで飛んでいた野鳥を地面に叩き落とした。

「し、死ぬかと思った……」

無線が入った。

「無事か？」

「はい。無事です」

基本的に大きければ大きいほど獣たちの知能は高くなるので、関門を襲うと返り討ちになるということを理解しているのであるが、鳥はあまり頭が良くないので、今回は襲ってきたというところなのだろう。しかし、学問的に言われている巨大な野生の獣（怪獣類以上の大きさと認定されている生物）と戦ったという記録は既に千年以上前の出来事となっている。

実質のこの星の支配者は人間と言っても過言ではないのかもしれないのである。

「はあ、それにしても、僕は何の為にここにいるのだろうか……」

二メートル程の野生の獣が襲ってくることは珍しくない。というよりも毎日である。そういうやつらを撃退することが主な任務であると思われがちなのであるが――

「まあ、本業は対テロリスト用だよね」

この帝国を内部から崩壊させようとする人間を入国させない為に存在しているのである。野生の獣はもちろん怖いものである。何の武器がなくても普通の人間を簡単に殺してしまうことができるやつがごまんといるのである。しかし、人間の方が怖いのである。隣人が豹変してしまうことはもちろん怖いことなのであるが……。

ウーウー、と非常用の警報が鳴り始めた。

『時間強盗を発見！ 侵入を阻止せよ！』

スピーカーから凄く偉い人の声が聞こえる。

『侵入された模様！ 直ちに全兵力は内部へ集結せよ！』

一兵卒の彼は時間強盗という世界最凶の犯罪者がここにいるということが信じられなかった。このような辺鄙な町に世界一の賞金首がやって来るなどとは夢にも思わなかったのである。でも、と彼は思い直した。いくら時間を止めることができると言っただって、警備の固い都会にずっといるということは至難の技なのかもしれない、と。

世界一の懸賞金がかけている時間強盗とは超能力を保有している大泥棒のことである。彼の能力は世界中にその力を誇示しており、自分以外の時間を止めるというものなのである。しかも、特に条件はないのである。自分の意思のみでほぼ無制限に時間を止めることができるというのが専らの噂である。

無線が入った。

「何をボーッとしているんだ！ お前も早く来い！」

「は、はいっ！」

応えながら走りだした。

「……ん？」

走っていると、背後に何かの気配を感じた。

警備兵が振り向くと少し後ろに一般人らしき男が並走していた。

重力に思いっきり逆らっている炎のような茶髪に茶色の瞳、少し肌は焼けていて、長袖のティーシャツにジーンズ、そしてスニーカーというラフな格好をしている。

「っ！ よく気づいたな！」

警備兵は一瞬だけ無視しようかと思ったのであるが、自分一人が加勢に行ったところで、時間強盗の方はどうにもならないだろうと思って、レーザー銃を向けて立ち止まる。

「ちょっと待って！ この関門は入国の許可がないと入れません！」

「くっ、ケチケチしないで通してくれ。非常事態なんだろ？」

男もそう言いながら立ち止まった。

「それとこれとは話が別です！ さあ、許可証を見せて下さい」

そう言うと、男は俯きながら、にやり、と笑って言った。

「……もし、ないって言ったらどうなるんだ？」

警備兵にとって幸いなことに、まだ関門の外である。

「帝国の威信にかけて、この門は通しません！」

「そっか……それじゃあ、押し通るまでだ！」

男は威勢よく言い放った。

この装備を見て、押し通る、だと……？ と、警備兵は驚きを隠せない。鎧を着て、レーザー銃、レーザーソード、バリヤを所持しているのがわかるはずなのである。そして、閃いた。

「魔術師か、超能力者ですね？」

思ったことを口にする。

「超能力者だ！」

そうすると、意外なことに返事が来た。しかし、それが本当かどうかなんてわからない。特に超能力者だとしたら、その能力によってはどうしようもない。警備兵は難しいことを考えるのをやめた。とにかく、そう言うのであれば手加減はなしだ！ と思った。

「それ以上近づいたら撃ちます！」

「何を？」

「えっ？」

気がつくと、レーザー銃は手元になく、球体であるバリヤの上から声が聞こえていた。

「もしかして、こいつで？」

男は一瞬でレーザー銃を奪って、バリヤの上に座り込んでいた。

「なっ……！」

「銃の方しかぶんどれなかったぜ。でも、ソードは扱いが難しいからな。これでバリヤを破るのは簡単になった。さ、これでも通す気はない？ ま、このまま走ればっ……！」

話している途中でバリヤを解除してレーザーソードで斬りつけた。

男は関門を背にしてバック宙でかわし、こっちへ銃を向けて着地した。

「あちゃー、さっきの様子だと新米の腰抜けだと思ったのに、意外と骨があって驚いた。これなら全力で駆け抜けるんだっ……」

返す言葉は決まっていた。

「背を向けるのも良いでしょう。でも、その時は僕の刃が貫きます」

彼は剣術に自信があった。相手が時間を止められる時間強盗でもない限り、正面からぶつかれば負けることはないだろう、と。彼はガンマンと言うより、ナイトなのである。

\*

ああ言ったけれど、だからってここを通り抜ける自信がない訳じゃない。むしろ、タイマンで喧嘩をするというなら、絶対に勝つことができる自信がある。たとえ相手が剣を持っているとしても、それでさらにいづらか強くなったとしても、それは揺らぐことはない。銃を持っているということもあるんだけど、それはあんまり関係ない。

自分の超能力は対人として非常に優れているということを自覚しているのである。でも、この剣士と認めている相手から放たれている威圧感が本物であるということに間違いはない。背を向けるのは多分、最終手段にしないとイケないだろう。戦闘になったところで即死することはないかもしれないけれど、致命傷を受ける可能性は決して低くない。外見から判断すると同じくらいの歳だというのに、ここまでの雰囲気があるということを素直に尊敬している。

「なあ、話は変わるけれど、何歳？」

「十七だ！」

律儀だな！ 同じ歳か！

「いや、本当に才能があるよね」

「からかっているなら、こちらからいきます」

話し合いで収めるのはもう無理……？

「おおおお！」

上から下に、真っ直ぐな良い太刀筋で来た。

普通に斬りつけられる訳にはいかないので、軽く右へ避ける。

そこに一文字を書くような一閃が来る。ソードの上に乗って、相手を驚かすという手もあるけれど、精神的な揺さぶりはもう通用する気配がない。素直に後ろへ飛んで避ける。

そして喉への突きだ。必殺の手という訳じゃないだろうけれど、あまり実戦経験がないので、全てが彼の中でそうになっているだろう。ボクシングで言うとジャブを打たずに、一発ノックアウト狙いでアッパーを繰り返しているようなもんだ。だからって俺がそこまで器用な戦い方ができるのかと言われると、そんなこともないんだけど。そうなんだ。下手をするとこっちがこの勢いにやられかねない。このくらいでどうにかして流れを引き寄せておかないと、真剣に致命傷を追うかもしれない。

僅かに体を逸らすだけでその突きを無効にして、相手が反応する前に銃で胸を撃つ！

「なっ！」

思わず声を上げてしまった。

光の速度を超えろ。そして、その時間を掴み取れ。

なんてやつだ！

ここまでしなければいけないなんて思わなかった。

『時間を止める』なんてあまり多用できることじゃない。

この新米さん、俺がどこへ撃つのかわかっていやだった。

レーザー銃が光の速度で対象へぶつかるのは常識である。

そして俺は相手が反応できない、つまり、認識することができない速さで動いたはずなのである。それができるから俺は強いのである。相手も同じ、もしくはそれ以上の速さで反応したのか？ いや、その可能性は低いだろう。何故なら、視線が全くこっちへ向いていないのである。手元だけが反応している。見ないでこの所業を振る舞ったのだ。こっちの胸へと正確に返されたレーザーが止まっている。

「……まあ、このタイミングで止めたのは良かったのかもしれない。油断している時にやられたら終わりだった」

時間を止めていられるのはあと数秒だ。

「剣なんて全然興味なかったけれど、ここまでやれるようになったら使える」

レーザーを避けて、固く掴まれている剣を無理矢理奪い取る。尋常じゃない筋力だったら無理だったけれど、そうでもなくて助かった。

時間が戻る。

「ああ、本当に死ぬかと思った。けれど、流石に武器がないと戦えないでしょ」

「えっ？」

声を出すのもなかなか速い。

「じゃーなー！ 本当に強くて驚いたぞ！」

「えっ？ あれっ……しまった！ 待ちなさい！」

「そうだよな、やっぱり丸腰だとしても、追ってくるよな……」

念のためにもう一度だけ時間を止める。

関門の中に入って、姿をくらすことが出来てから、また元に戻す。体力には結構自信があるんだけど、初戦闘でここまで疲れてしまうなんて思わなかった。殺し合いなんてまだ想像することができない。

「これが慣れていないからだということであって欲しいや……」

\*

関門を抜けると、そこには古いレンガ造りの街並みが広がっていた。

密林も海も近くて、古いレンガ造りの町並みから歴史も感じることができる。帝国は世界でも有数の科学技術の進んだ国であるが、その町のほとんどに多くの積み重ねられた歴史のある立派な国でもある。特に自由が重んじられているが、比較的歴史の浅いアメリとはやはり違う雰囲気があるのである。

「まあ、一長一短なんだろう。どっちの生まれでもない俺には両方とも新鮮であることには変わらない」

新米兵士が追ってくる気配はない。

レンガで整備された一本道を走って、そんな独り言を呟いていると、目の前に公園が広がってきた。ちょうど良いや。このまま走っていても、怪しまれることはないだろう。

何気ない顔をして公園のど真ん中を走り抜けようとした時だった。

目の前に顔くらいの大きさの爆発が起きた。

なんとか立ち止まって、それを避ける。これは爆発系属性の魔術っぽい。詳しくないんでどんな種類の魔術なのかわからないけれど、帝国の誰かに気づかれたのか……？

「ねえ、貴方、この国の人間じゃないでしょう？」

女が近づいて来た。今の爆発はこいつの仕業か……？

肩より少し長いくらいのブロンドヘアに青い瞳、ここが辺境なんで服装じゃ帝国の人間かどうか兵士じゃないと分かり辛いけれど、旅人のような外套を纏い、下はジーンズにブーツを履いている。

……どこかで見たことがある気がするけれど……？

「……そうだけれど？」

「ふふふ、全然怖がらないのね。それもそうかしら。あれだけの超能力を保有しているんだものね」

……こいつ、さっきのいざこぎを見たのか。

「さっきの兵士とのやり取り、見ていたのか？」

「ええ、たまたま少し前に入っていたから、見ることができたの」

「何の用だ？ やる気か？」

「ふふ、可愛い。そんなに殺気立たないで。何が目的かわからないけれど、この帝国に不法侵入するということは相当な覚悟がいることよね。とりあえず自己紹介をしておくわ。

私はエミリー・ブラウンよ。ミリーって呼んで。聞いたことないかしら？ これでも、大魔術師の称号を持っているんだけど……」

あっ……！

「活火山のミリー！」

そう言って指を差す。火を操る魔術が使える賞金稼ぎだということしか知らないんだけど……。

「貴方ね、人を指差すのは失礼よ。そうそのミリー。自分で言うのも気が引けるじゃない？ あ

「あなたの名前はなんて言うの？」

腕を下ろす。

「……一（ススム）」

「……知らないわね。この星のジョニー・アップルシード系の名前だということはわかるけど」

「嘘かもしれないぞ。まず疑ってかかるべきだろ」

「あんなデタラメな超能力を持っていたらどの世界でも有名になるはずだわ。それがジョニー・アップルシード系なら、時間強盗のように尚更ね。時計も確認させてもらったわ。貴方、時間を止めたでしょう？」

「……ちっ」

流石は大物だ。抜け目がない。

「魔術で素早く動いた訳じゃない。それに似た、あるいはそういうことも含めたことのできる超能力かもしれないけど、貴方は確かに、一瞬だけのようだったけど、時間を止めていたわ。時空間操作系超能力ね」

「……」

「超能力者って怖いわ。覚醒したらいきなり規格外なもの。私たち魔術師みたいに努力する必要がない。羨ましいわ」

「それはあんたの偏見だと思うけれどな。それで、一体何の用なんだよ？」

「無駄話は嫌いかしら。まあ、好都合ね。良いわ、私と手を組まない？」

「……手を組む？」

「そう、私は今、時間強盗を追っているの」

\*

おいおいおい、化け物だらけじゃねえか、と彼は思った。

活火山のミリーをつけて来たら、時間強盗が現れて、その上に一瞬だけでも時間を止めることができる少年まで現れたのである。戦闘的な特技のない彼からすれば恐ろしい人間ばかりだった

。公園のベンチに腰掛けて、二人の会話を盗み聞きしている。少しばかり遠いが、何とか聞き取れない距離ではない。どうやらミリーが自己紹介を始めたようだった。

彼はミリーの手柄を横取りするつもりだった。しかし、あの時間を止めることができる少年もいるとなると厄介なことになってしまう。しかも、次のミリーの獲物が時間強盗らしいということも厳しい現実であった。彼も切り札を持っているのだが、果たしてそれだけでどうにかなるか……？ と、一瞬だけ不安に思ったが、いや、どうにかなるか、じゃねえ、どうにかするんじゃ、と思い直した。なかなか強気な思考だが、彼はそういう思考をしなければやっていけないという状況に陥っているのである。自分の父親が残していった莫大な借金をどうにかするにはこれくらいのことをしないと難しいのである。

そして、自らを奮い立たせる為に、時間強盗は賞金ランク一位の化け物で、生死も問われないんだ、首でも持っていけば借金どころか何回も人生を遊び尽くせるんだ、と自分に言い聞かせた

。彼はデス・ソードを握りしめた。この剣にかけられている呪いは恐ろしいものである。対人ならミリーの魔術にだって引けを取らない。生き物に傷をつけるだけで殺す剣なのである。別名――諸刃の剣、とも言われる。この剣の持ち主は敵に何回それを奪われて、逆に殺されてしまったのか。希少だが、価値が低くて呪われている剣なのである。

関係ねえ、俺ならやれる、俺はやるんじゃ、と彼はまた自分に言い聞かせた。

\*

「……そっか。奇遇だな。俺もそうだ」

「これから賞金稼ぎになろうっていうこと？ あ、でも、私は彼を捕まえて引退するつもりだから、貴方は一獲千金を狙いに来たというところかな」

「いや、追っていることは追っているけれど、捕まえようとかそういうつもりは全くない」

「へえ、じゃあ、どうして？」

「話があるだけだ」

「……それは、大切なことかもしれないわね」

「……」

……察しが良いな。どんな話か聞かないんだ。

「良いわ、それなら生け捕りの約束をする。だから、私と手を組んで。なんなら賞金の一割を分けても良いわよ」

にっこりと笑って、手を差し出してくる。

良いことを思いついた。

「……しかし、あんたが本物という証拠はあるのか？ あの程度の魔術なら多くの魔術師が使うことができるだろうし、入国許可証を見せてもらっても、ただの同姓同名だったら意味がない」

ミリーの笑顔は消えて、手を元に戻した。

「……まあ、それもそうね。じゃあ、逆に聞くけれど、どうしたら信用してくれるかしら？」

髪を掻き上げながら言う。

「……そうだな」

周りを見渡す。

「こういうのはどうだろう。この公園で魔法と超能力を使っても良い鬼ごっこを一時間するんだ。それで俺を捕まえることができたなら――」

「私の勝ちね。手を組んでくれるということで良いかしら？」

「ああ、それで良い。その代わり負けたら――」

「負けたら？」

「俺の仲間になってくれ」

「――え？」

「聞こえなかったのか？ 仲間になってくれって言ったんだ。手を組むって言うで一時的なものだろ？ そうじゃない方が俺としては心強い」

「うふふふ、面白いじゃない。良いわ、始めましょう」

「あの時計が四時になったらスタートだ」

「オーケー」

ちょうど後二分もない。

## 第二章

---

秒針が十二時を指した瞬間に時間を止める。それは体感で五分程度が限界だ。しかも、限界まで止め続けたら、体に疲労が溜まって動けなくなる。二分半ほどで大きく距離をとらないといけない。とりあえず、ミリーを確認すると、もう既に大掛かりな魔法の詠唱を始めているんだろう。彼女の背後に大きな魔法陣が出現していた。うろ覚えだけれど、魔法陣が出るほどの魔法は使うのに数十秒かかるはずである。

「真っ直ぐに逃げても余裕か……？」

でも、俺が時間を止めるまでと、彼女が詠唱を始めるまでの時間だと彼女の詠唱の方が速いのか。なんてことだ。レーザー銃のレーザーを止められるんだぞ。やっぱり本物で間違いないんだろう。

真っ直ぐに距離を取って、時間を元に戻す。

「手加減しないわよ！ 行けええええ」

「えええええ！」

その時間を掴みとれ。

そして、時は止まる。

数十秒かかるだろうと思った魔術の発動が、解除と同時だった。振り向くと、そこには右腕から直径一メートルほどの火炎放射が三発ある。大魔術師の異名を持っているので、回復系属性の魔法は使うことができるんだろうけれど、それを差し引いても、あれをモロに喰らってしまうと丸焦げの大やけどで、一度致命傷を負うのは確実だろう。

連続でそう長く時間を止めることはできない。左に避けながら時間を元に戻す。

「ちっ、二回も止めたわね」

小出しにすると俺の超能力はかなりの回数で使うことができる。

それだけじゃない。

「ちょっと、何これ……？ 貴方、炎が燃えるよりも速い訳？ まずいつ」

公園の林の中へ入ると、あいつは急いで炎を消した。

「炎はただ空気中を燃えていた訳じゃない。方向と一定の速度を持って射出されていたのに、それよりも足が速いですって？ 馬鹿にしてくれるじゃない。足の速さには相当な自信があったっという訳ね」

お手並み拝見だ。ここは多分、魔術の練習場所としても使われている公園なんだろうけれど、流石に木を燃やせば警察に捕まる。

木の上に登る。

「さ、活火山のミリーが、火を使わないでどうやって捕まえようとするか、見物だ」

なかなか面白くなってきたぞ。

「聞こえているわよ、一君」

「なっ」

もう木の下にいる！

「どれだけ貴方に魔術の知識があるのか知らないけど、身体強化系属性って言われている魔法が

あるの。うふふ、人を見物ですって？ まるで檻の中にいる獣みたいに言ってくれるじゃない」  
長々と話しているうちにとんずらしたいけれど、目を見られてから動けない。  
「あと気になっているだろうということを教えてあげるわ。体が動かないんでしょう？ それは精神操作系属性の魔法よ。つまりね——」

その時間を掴みとれ。

やべえやべえ。このままじゃすぐに捕まっちゃうところだった。

「……」

喋ることができない。くっそ、時間が止まったところで、体を自由に動かせるようにならないのか……。それじゃあ、急いで考えろ。体の自由を取り戻す方法を。……思いつかない！ そもそも、俺のこれまでの人生はあまり魔術に触れて来なかったのである。魔眼という魔術や超能力の両方に分類されるものがあることは知っていたけれど、こんなの反則じゃないか。って、こうやってダラダラ考えていても、結論が出ないなら体力を消耗するだけだ。こうなったら、とりあえず時間を戻す——

「貴方の体は私の意のままに動かせるということ。やっぱりこっちの世界に入ってきたばかりで、魔術に対して何の抵抗力もないみたいね。これじゃ、あまりにも面白くないわ。知っているかしら？ 時間強盗が強い理由を。彼の超能力は確かに凄いわ。でもね、逆に言うと、それだけじゃ時間を止めることしかできない、ただの普通の人間なの。普通の超能力者ならね。でも、彼は違う。超能力者で魔術師、その上に」

超能力者で魔術師、だと？

「世界中の強力な魔法道具を所持している。流石に魔法道具は知っているわよね？ 現在の科学の体系で捉えられない神秘、つまり、魔法や超能力によって作られた魔法のような効力のある道具のことよ。ま、自分の超能力を一番活かせる道を選んだ訳ね」

「時間を止めて、魔法道具を盗む……」

あれ？ 話せた。

「そ。口だけは動かせるようにしてあげたわ」

確かに後はどこも動かない。視線さえ動かすことができない。

異常なまでの緊張で、体が動かないような感覚——

ミリーの目が怖い……。

「超能力者が近代兵器を使うことができるだけでも厄介なのに、その上をいく魔法道具を使われ、時間まで止められちゃったら捕まえるなんて無理じゃない？ ま、貴方はその為のジョーカーということね。魔法道具と魔術は私がなんとかするから、時間を止めた時に貴方の出番ということね。お互いに時間を止めあうなら、あるいは……話が逸れたわね……」

木の枝の上で、しゃがみ込んでいるしかない。

「よくお聞きなさい。ハンデをあげるわ。貴方には魔法の才能があるみたいだから、その力を少しくらい使えるようにしてあげる。いえ、正確にはそうならわないと困る。時間強盗が精

神操作系属性の魔術を使った時にあっけなくやられちゃったら意味がないものね。ちなみに、私はどっちかというとな精神操作系属性の魔法は苦手なの。でも、時間強盗は得意なのね。私だって一流の魔眼の使い手ではあるわ。でも、彼はそれを凌ぐはず」

そう言って、彼女は木の上にしゃがみ込んでいる俺に手を向ける。

「何をするんだ？」

「魔術をゼロから使えるようになる一番の近道はね、純粹な魔力の波動を受けることなの。それが強力であればある程、魔法に対する能力が開花するわ。もちろん、肉体的な損傷と引き換えにね……！」

「ちょ、ちょっと待ってくれ」

ミリーを中心にして、風が凄いい勢いで渦巻いている。

「何かしら？」

「あんた、回復系属性の魔法は使えるんだろうな……？」

ミリーはニヤリと嫌な笑みを浮かべる。

「使えても、使うかどうかわからないわ……さあ、ちょっとばかり魔法の才能がある貴方が、私の全力の魔力をぶつけられて、どうなるか見物ね……！」

っ！ まだそれ怒っていたのか！ 勘弁してくれ……。

「覚悟は良いわね？ 喰らいなさい！」

「あああああ！」

真っ赤な光と風を受ける。

\*

寒い。驚いた。もの凄く寒い。真冬に冷水をかけられたとかそんな生温いもんじゃなくて、一瞬で絶対零度になって凍らされるような感覚だ。死ぬ。このままじゃ死ぬ。間違いなく死ぬ。凍って死ぬ。凍死する。凍え死ぬ。

視界からミリーが消える。目の前が真っ赤になる。まるで真っ赤な針が目突き刺さるような感覚がする。痛い。痛い。いたいイタイいたいイタイイタイ痛いイタイイタイイタイ——

目だけじゃない。体中が大小様々な刃物で突き刺されたような痛みがする。地獄の千本の針の山に寝転がるとこうなってしまうんじゃないだろうか。

痛い痛い痛い痛い。イタイイタイ——イタイイタタタイイイイ。

痛いけれど死ねない。痛いけれど死なない。痛いけれど死にたい。痛いけれど死ぬ。

殺してくれ。いっそのこと、殺してくれ。死にたい。なんだこれ。こんなの笑ってやれるなんてあいつどうかしているぞ。誰か俺を殺してくれ。早く。早くだ！ 死にたい。殺してくれ。

「一君！ ちょっとやり過ぎたみたいね……聞こえる？」

……聞こえるけれど、話せない。

「大丈夫、貴方の思考を読む魔術を使っているから、思うだけで聞こえているわ」

やばい。寒い。痛い。イタイイタイイタイ——

「落ち着いて！ その調子じゃ私の思考がおかしくなっちゃうわ！」

どうしろって言うんだ。

「目の前のイメージをよく見て。それはあくまでも貴方の中のイメージよ。そこで何かすることで貴方の精神状態が回復する。そしてそれは魔術が使えるようになる条件なの」

何かって、なんだよ。真っ赤で何も見えねえよ。痛くて何もわからねえ……ん？

気がつくや虹色のトンネルにいる。なんだこれ？

真っ赤な視界と痛みがなくなる。けれど寒っ！寒い寒い寒い……

「先に何か見えるかしら？」

何も見えない。

「そうね……全力で走ってみて。ほら、暖まるかもしれないし」

なんだそれ。

でも、試しに走ってみるが、床が下がって戻る。エスカレーターを逆走したような感覚である。

床が戻るって……。

「間違いはないわ。その自己イメージのトンネルを抜けるという過程を踏んで、貴方は魔術を使うの」

それじゃあ突っ走るまでだ！ おおおお！

駄目だ、同じスピードで戻ってしまう。

どうにかならないのか。

「結構手間がかかるタイプね。周りに何かヒントがあるはずよ」

そんなことを言われても、何もない。

「私には多分わからないわ。貴方だけがわかるヒントがあるはず」

……そういうことか。俺だけがわかる俺が魔術を使う方法って。

おい、覚えてろよ、ミリー。

その時間を掴みとれ。

この世界の時間を止めて、突っ走る。

\*

目が覚めると同時に全身をバネにして一瞬で横の木の上に飛び乗る。体が異様に軽い。さっきの三倍くらいのジャンプ力がありそうだ。もしかしたら空も飛べるかもしれない、というくらいである。

「お目覚めね？ 気分はどう？」

下にいるミリーを見る。

再び緊張感のような金縛りが襲ってくる。

イメージするのは虹色のトンネルだ。

時間を止める感覚を以て、金縛りを無効化する。

その時間と掴みとれ。

この先の向こうへ――

「なあっ！」

なんだ？

ミリーが両手で両目を抑えて、うつむいた。

「面白いじゃないの……！ 貴方もどうやら魔眼持ちみたいね。魔力を以て魔眼と視力を封じる簡単なものみただけけれど、その魔眼は対人で一番役に立つわ。私もやればできる。オーソドックスだけど、なければ魔術師は名乗れないものよ」

「へえ……」

「ちっ、余裕があるわね。それもそうだわ。貴方の身体能力は既に世界トップクラスのレベルみたい。悔しいけど、性差もちょっとあるし、タイマンで殴り合ったら、私じゃ勝てないわね……。時間強盗はそれほどでもないっていう噂だから、今の貴方なら本当に……！」

「……まっ、とりあえず、逃げるわ」

「あっ」

二十メートル程飛んで、木に降りる。ミリーも一瞬で地上から追いかけてくる。

「魔術を使わないでそれ？ どういう魔力量なのよ」

このままなら逃げきることもできるかもしれない。

「私を舐めないで欲しいわね。さっきはちょっとやり過ぎたけど、今度こそ捕まえさせてもらうわよ」

別に捕まえなくても良いんだけどね、と呟いているのが聞こえる。

仲間っていうのはちょっとやる気が起きないかな。でも、負けず嫌いみたいだし、効果がないこともなさそうだけれど。

「ミリー」

木の上を飛びながら言う。

「条件を変えよう。俺が勝ったら下僕っていうのはどう？」

「どうしても本気で鬼ごっこがしたい訳ね。それでも良いわよ。ただし、それなら私が勝った場合も同じ条件にしてもらえるかしら……？」

「構わないぞ」

「そ。じゃ、ちょっとはやる気が出るわ。レーザー銃より先にレーザー撃ちを習得した魔術師がいたのはご存知かしら？」

……まさか。

「レーザーはレーザーでも、私のやつは完全な追尾付きなの。詠唱に少し時間をかければ百発ほど同時に打てるわ」

百発？ 今、確かに百発って言った？

「詠唱がなくてもね、走りながらなら十発ほど撃てるわよ！ はあっ！」

信じられない。真っ赤なレーザーが十発ほど手のひらから放たれ、木の枝の間をくぐり抜けて追ってくる。

身体能力が上がったとしても、光の速度で動かなければ被弾する。

「……はっ、ふう、見えなくなったわね」

時間を止める直前の速さで動き続けて二十分後だった。時間を止めながら逃げ回ったけれど、流石に十発全部を被弾した。

レーザー銃をレーザーに向けて撃って相殺する程の銃の腕はないし、同じようにレーザーソードでレーザー銃を弾き返すだけの剣術の技量はないのである。

疲労と外傷で動けないところに、ミリーがやって来た。

「たちち！」

「……」

言葉を返す気力もない。

「レーザー十発でノックアウトね。でも、外傷というよりは光速の維持がきつくて駄目になったのかしら。ま、どっちにしても、この茶番は私の勝ちよ」

魔術の基礎が使えるようになった時は負ける気がしなかったのに……。

「この分なら体力も頑丈さも合格点ね。よし、しょうがないから、下僕にしてあげるわ」

おお、なんという屈辱なんだろう……。

「あと、仲間の件ね。あれは時間強盗を捕まえられたら、考えてあげても良いわ……って、ちょっと、気を失いそうなの？ しょうがないわね、回復系属性の魔術を使ってやるから、もう少し話し相手になりなさいよね。久しぶりにまともそうな男と話せて面白かったんだから……あ、駄目か」

\*

ここはどこだろう？

ぼんやりと天井を見る。何があったか思い出さないといけない。

そうだ。新米っぽい兵士と戦った後に関門を突破して、その後は活火山のミリーと出会って、自分の力を試すという目的もあって、何でもありの鬼ごっこをしたんだった。

どうやらここはホテルのシングルみたいだ。木彫が見事な寝具である。多分、ミリーが取ってくれたんだろう。

ベッドの上で上半身だけを起こす。体はどこも痛くないけれど、重たい。重度の鬱病を患うとこんな感じになるんじゃないだろうか……。

コンコン、と部屋のドアがノックされる。

「はい」

「あっ、起きたのね、私よ」

ドア越しに声が聞こえる。

「誰ですか？」

「貴方、私をからかっているでしょ。ミリーよ、ミリー」

「どうぞ」

そう言うと本物のミリーが入って来る。

「おっ、本当にミリーだ！」

「まあ、確かに魔術や超能力、そうじゃなくても声真似が上手い人っているからね……」

半ば呆れているように見える。

「ところでここは？」

真面目な話をしよう。

「この町のホテルよ。貴方が鬼ごっこで力尽きたら、ちょうど日が沈んできたから、宿を取ったの。魔力を回復するのは睡眠が一番だし、体力だって回復するからね」

まあ、そんなところだろうと思ったけれど。

「なあ、魔力と体力って違うのか？」

「基本的には同じものと考えても良いわ。体力がなくなると魔力もなくなるけど、魔力がなくなっても体力はなくなるらない。そんな関係ね。余っている体力が魔力になるって言うと分り易いかな」

「なるほど」

「……貴方、そんなことも知らないのね」

「俺は元々、シビリアンなんだ。スポーツはやってたけれど、切った張ったとか、魔法だとか、そういう世界にはうとい」

「確かに、今のこの世の中じゃ、多くの分野のスペシャリストになることは大変ね。政治、経済、軍事、科学、魔法、超能力、魔法道具、どれを取っても、奥が深いもの。良いわ、この際だから、知りたいことを全部聞きなさい」

そう言うと、ミリーは置いてあった椅子に腰掛けた。

「そうだな……じゃあ、あんたが言っていた矛盾の話が聞きたい。魔術をゼロから学ぶ為には肉体的損傷と引き換えになるって言っていたけれど、俺は魔術が使えるようになった時はピンピンしていた。おかしくないか？」

「おかしくないわよ？ 貴方が私の魔力の波動を受けた時、一瞬でその強化されている服以外は黒焦げになったもの。あ、もちろん、命に別状がない程度にね。そして、魔術が使えるようになった瞬間に、外傷はほとんど消えたわ。自己治癒力が急激に高まったのね。その時に尋常じゃない魔力を持っていることがわかったけど、まさかここまでとはね……基礎的な体力や自己治癒力は魔術が使えるようになると上がるのが証明されているの」

「そうなのか……」

「あの時は怒っていたから気付かなかったんでしょけど、それを今まで覚えているなんて、貴方って思ったより賢くて冷静ね」

「そんなに頭が悪そうに見える？」

「……見えないわ」

見えるんだな……。

「他に何か聞きたいことがあるかしら？」

「そうだな……魔法についてはざっとどんな属性があるのか聞きたい」

「そうね……簡単に五種類の色があると覚えると良いわよ」

「色？ 俺は属性について聞いているんだけど……」

「超能力は系統属性で分けるけどね、魔術は科学と同じで日々進歩しているわ。超能力のように希少な存在で、ぱっと使えるようになる訳じゃないし、今でも私も知らないようなユニークで戦闘向きじゃないものもいっぱい開発されている。貴方はそういうものが知りたい訳じゃないでしょ？」

「……まあ、確かに」

「系統はそれを無理矢理に当てはめたものなの。超能力は科学でも魔法でも本来なら人の身だけじゃできないことを指しているのね。だから、系統で分けやすいけど、厳密に魔法を系統で分けることは大変なことなの。それなら、赤、青、白、黒、緑の五種類の色に分類されていることを理解する方が良いわ」

「……なるほど。なあ、ところで、話を聞いていて疑問に思ったんだけど、魔術と魔法って何か違うのか？」

「……」

あれ、ミリーが凄く呆れた顔をしている。

「そう、貴方、そこまで何も知らないのね。人助けは好きだから全然構わないけれど、よくそんな知識しかなくてこの帝国に不法侵入までしようとするわ……」

そんなに呆れなくても良いじゃないか。

「何だよ、知りたいことを聞けって言うから……」

「そうね、私が悪かったわ。この世界には人間を除いて、何種類もの上位種族がいるわ。それ

は知っているかしら？」

「ゴブリン、魚人にエルフとかだろ。友達もいたぞ」

「そうなの、それなら話が早いわね。彼らのように私たちと同じ言語を習得している者たちを上位種族と言っているわね。その他は獣に分類される。獣の中にも魔法を使う者が極稀にいるんだけど、人間が使う魔法が魔術と呼ばれて、彼らが古来より使っていた神秘のことを魔法と言う訳なの」

「は一、なるほど」

「これはまあ、補足というか、豆知識なんだけど、人間以外の上位種族は五種類の色のもので分類されているの。魔力の色を感覚で感じ取れるのよ。他の上位種族から見れば、人間だけが個人で様々な色の魔法を使うことができる特別な存在という訳ね」

「ああ、でも、帝国には他の上位種族はいないんだよな？」

「そうよ。ここが人間至上主義の帝国ね。シビリアンなだけあって、そういうことは知っているのね。あ、聞いてばかりも辛いかもしれないから、私から質問しても良いかしら？」

\*

「どうぞ」

「貴方はどこの国の出身なの？ 多分、アメリカから一緒に船に、形はどうあれ乗って来たんじゃないかと思っているんだけど、違うかしら？」

「そう、アメリカから密航して来た。出身なら時間強盗と同じ、ジパンだ」

「なっ、出身がジパンですって……！ まさか貴方も貴族じゃ……？」

「元々はそうだったらしいけれど、何代か前に時間強盗と同じでその称号は剥奪されたらしいぞ」

「そうなの……？ 嘘ならやめて欲しいけど。後から実は皇族でした、なんて言われたらたまったもんじゃないもの」

「ははは、まあ、俺が知っている限りじゃ、そういうことらしい」

「……ま、まあ、特に無礼な真似はしていないわよね」

「そうだな」

活火山のミリーでも、やっぱり貴族や皇族に弱いのか。

「他に魔術について聞きたいことはないかしら？」

「あるぞ。魔法の賢い分類の仕方は色なんだよな？ それぞれの色の特徴を教えてくれ」

「わかったわ。基本的に赤は外的要因によって攻撃することを得意としているの。青は赤の反属性で、外的要因から身を守ることを得意としているわ。同じように黒と白が対の属性になっていて、黒が内的要因から攻撃することを得意としているもの、白が内的要因から身を守ることを得意としているわ。そして緑の魔法だけが反属性や対になっているものがない魔法で、命を生み出すことを得意としているものなの」

「へえ……それでミリーが得意なのは赤と黒か」

「ご名答。よくわかったわね。どれも人並み以上に使えるから大魔術師なんて大仰な異名をもらっているけど、人間以外の上位種族のエキスパートと肩を並べられるのは赤と黒くらいね。黒は少し微妙かな。貴方も得意な魔術を調べる方法があるわよ。試してみる？」

「ああ、是非ともやってみたい！」

「簡単にできるわよ。私と握手して」

「はい」

出された手を握る。

「覚えたてのイメージから、目を閉じたまま、魔術の工程を踏んで」

目を閉じる。

イメージするのは虹色のトンネルだ。

その時間を掴みとれ。

この先の向こうへ――

ボウツと強めの火が着いたような音がした。

目の前が真っ白になる。

「白が得意……？」

「そういうことね。貴方から流れてくる魔力を私が逆流させて、貴方に見せたの。たまに呼吸が合わない人とはこれが上手くいかないんだけど、相性が悪くもないみたいね」

ちらちらと緑色も見える。

「貴方も少しだけ緑が使えるみたいね。明日までにはちょっと無理だろうけど、時間強盗を上手く捕まえることができたなら、報酬として魔術を教えてあげても良いわよ」

「それは本当か？」

「ええ、嫌だと言うならもちろん、覚えなくても結構だけど——」

「ぜひ教えてくれ。俺って本当についている！」

「ふふ、そうね」

目を開けて手を離す。

「魔法について聞きたいことはもうない」

「そうなの、それじゃあ、そろそろ、明日の作戦を立てましょう」

「明日の作戦？」

「そうね、そういえばこのことも知らなかったわね。時間強盗は明日、大きく動くはずなの。よく聞きなさい——」

ミリーは明日の作戦の話を終えると、私も疲れたからもう休むわ、と言って、隣らしい自分のホテルの部屋へと戻って行った。

この帝国に着くまでの一年は特に色々なことがあったけれど、今日ほど実りがあったと言える日は他にないだろう。合法的にはいかなかったが、レーザー銃とレーザーソードをまず手に入れることができた。あの新米っぽい兵士は元気でやっているのだろうか。初めて能力を使って戦った相手なので、出来る事ならまたいずれ戦ってみたい。その時はお互いにもっと強くなっていて、壮絶なものになるかもしれない。けれど、別に彼が俺を追う理由はないのか。またもしも、ということを考えてしまうのだけれど、剣を教えてくれたら最高なんだけれどな……。

最も大きな収穫と言えるのが、もちろんのこと、活火山のミリーとの出会いだろう。彼女のおかげで自分の超能力の性質をよりよく知ることが出来たし、何よりも魔術の基礎さえ使えるようになってしまったのである。俺には白と緑の魔術の才能があるらしい。魔術師というよりも、完全に格闘家タイプね、と言われたけれど、確かに何かを念じるよりも体が先に動いてしまう質のような気がするんで、その言葉をありのまま受け入れるだけである。このままだと彼女にどれだけ感謝しても足りない。これから俺が自分の目標に近づくためにどれだけ必要だったのかわからない程の努力と経験を、簡単に与えてくれたのである。

これからの俺の自分の目標——時間強盗だ。

共通点はいくつもある。新しい世界を開拓した人々に贈られるジョニー・アップルシードという名誉ある称号を受けた同じ貴族系の名前であり、その人々が初めてこの星に降り立ったジパンという島国の出身であるということ、そして何より、時間を止めることができる超能力を持っているということである。時空間操作系という超能力に分類されるその能力は、未だに時間強盗しか観測されていないのである。空間に作用する超能力を保有している人は数多く観測されているのであるが、時間に作用する超能力は観測され辛いということもあるかもしれないんだけど。

そんな数奇な運命に、酔っているのかもしれない。どうして俺にこんな力があるんだろう。超能力は遺伝的な要因で使えるようになるものじゃない。何か理由があるんじゃないだろうか。何か理由が必要なんだ。俺だってそんなに強くない。物を壊すことに関してはミリーの方が圧倒的に上手いし、そういう意味だけじゃなくて、こうやって何も成し遂げていないというのに、感傷に浸ってしまうことだってある。

何より怖い。一般人の超能力者の扱いは精神病患者とあまり変わらないのである。異端なモノを見る目で見られ、石を投げられ、あらぬ噂を立てられて、普通に暮らすことができない。人並みの幸せは手に入らないだろう。辛い未来が待っているかもしれない。

どうして——？

どうしてこんな超能力に目覚めてしまったのか。どうして自分だけがこんな目に合わないといけないのか。

超能力者はどこかの国に属して、軍隊に入らなければいけない。そして特別な階級を与えられて、兵器のように使われる。ジパンでさえそうであり、例外の国は存在しないのである。

ベッドから起き上がり、窓のところまで歩き、それを開けて夜空を見上げる。涼しい秋の風

が入ってくる。満月が見える。部屋に置いてあるパソコンの端末で調べればわかることでもあるが、ミリーから今日が満月であることを聞かされていた。大気も澄んでいて、とても綺麗だ。

この町には小さなものだが、時計塔と呼ばれるものが東の山の方にあるらしい。それが織り成す神秘に時間強盗は惹かれているというのである。時計塔が起こす神秘、それは『時間を止める』ということである。ただの時計塔が時間なんて止めてどうするんだろう、とミリーに尋ねてみると、時間強盗もそれが知りたいとか、そんなものよ、と言われてしまった。この世界にはまだわからないことが山ほどある。科学を駆使しても未だに魔術の理を解明することはできない。

俺の未来もまだわからないのだろうか。良い意味でも、悪い意味でも、わからないということは間違いなんだろう――

### 第三章

ピピピピッとベッドに付いているアラームが鳴っている。止め方がわからなかったんで使おうかどうかと思ったんだけど、この時間まで自然に起きることができなかったということは使って正解だったということである。もう何回目になるんだろうか。そろそろ起きた方が良くないんじゃないだろうか。いや、そろそろ起きないとまずいんじゃないだろうか。どうして起きないとまずいんだっけ？ ああ、そうそう、ミリーと一緒に朝食を摂ろうという話になっていたんだ。性格から鼻真目に見なくても、ミリーは愛らしいタイプの美人である。そういう人が朝食と一緒に食べようと誘ってくれたんだ。是が非でも行くべきなんじゃないのか――

とりあえず、上半身を起こしてアラームを止めようとボタンを押す。カチッと音がして止まった。よし、とりあえず、普段着の強化服に着替えないといけない。そう思ってベッドから起きて、強化服に着替えると、またピピピピッとアラームが鳴り始めた。あれ、おかしいな。周りをよく見ると、説明書が時計の近くに貼ってある。ああ、完全にアラームを止めたい時は二度押しなんだ。カチカチ、と押して、アラームを止める。

こういういい加減なところは直したいんだけどなあ……。

昨日までは他に興味に移りがちだったけれど、ミリーはそんなに女の子への興味がない俺でも恋人にしたいくらい美人であることは間違いない。今まで勉強とスポーツに必死だった俺でも、時間強盗という目標が近づいてきたせいもあるのかもしれないが、春がやって来ないだろうかという気持ちがあることに少し驚いている。よく考えると、握手まではしたんだっけ。どの色の魔術の才能があるのか調べてもらった時に、全然そんな気持ちはなかったんだけど、そういう形にはなっていたのである。ん？ よく考えたら思考すら読まれていなかったっけ？ ……まあ、変なことは何も考えなかったんで、良しとしようじゃないか……。

時刻はそろそろ九時になろうというところである。ちょうど待ち合わせの時間になる。顔を洗って歯を磨いて、部屋に鍵をかけてロビーへと向かうと、その向こうにある食堂の前にチェックのシャツにジーンズというカジュアルな服装をしたブロンドの女性がいた。

……あれはミリーか？

もう少し近づいてみないとわからない。昨日は薄茶色の外套を着ていたし、どのような服装をしていたのかちゃんと覚えていない。

すたすたと近づいていくと、向こうが俺に気づいて、声を掛けてきた。

「遅いじゃない。三分遅刻よ。レディーを待たせるなんて、どうかしているわ」

やっぱりミリーだった。

「む……すまない」

「そこは申し訳ございませんでした、ご主人様、でしょ？」

……そ、そういやそういう約束だったっけ……。

昨日はホテルに来た後も普通だったんで、忘れていた……。

「っ、も、申し訳ございませんでした。ゴシユ……じんサマ……」

頭を下げながら言う。

「ぶっ、ははは、ごめんごめん、やらせておいてこんな風に笑うなんて失礼ね。でも、やればで

きそうじゃない。貴方はそういうこと全然駄目そうだと思っていたんだけど、人間って意外なところがあるものね」

「これくらいなんでもないぞ」

「だいぶ無理しているって顔しているわよ。まあ、これから常にご主人様と呼べとか、敬語を使いなさいとか言わないから、自然にしているっていいわ。その代わりに、私の命令には絶対服従ね」

「……あの、つかぬことをお伺いしたいのですが……」

「だから、普通に良いって言っているのに。何かしら？」

「これっていつまで続ければ宜しいんでしょうか……？」

「そうねえ。まあ、普通に考えれば今日の作戦が終わるまでね」

「捕まえられなかった場合は捕まえるまで続けるなんてことは……」

「今日の出来次第でこれからも貴方と一緒に行動するか決めるんだから、落第点ならもう一緒にいることはないわ。安心しなさい。あ、だからって手を抜いているってわかったら、タダじゃおかないからね」

「……はい」

「まあ、こんなところで立ち話もなんですよ。さ、早く中に入って、エネルギー補給しないと！」

「……はい」

ミリーと甘い雰囲気になれるかもしれないなんて思っていたんだけど、そもそも、俺の立場は彼女の下僕ということになっているのであった。協力関係をやめるなんて考えられないし、力づくで関係を変えることもできないだろう。まあ、そういうことを考えるのはまたの機会というところか。

朝食は豪華なバイキングだったんで、ミリーに言われたものと自分の好きなものを取ってきて、並べて食べる。腹が減っているからがっついて食べる。

「へえ……貴方、美味しそうに食べるのね。そういうところ好きよ」

「ん？ そうか？」

大量のおかわりをした後、改めてゆっくり食べているミリーを見た。

……綺麗だ。

仕草が上品なのである。コーンスープをスプーンで掬いあげて、口に運ぶだけの動作がとても美しく見える。

「何よ、急にジロジロ見て。恥ずかしいじゃない」

「ああ、ごめん。食べ終わって暇だったんで」

「そんなに急ぐ必要ないのに。余裕がある時は優雅にしないと……まあ、それは女の子の話ね」

うむ、と頷いて、外を見る。

今日はちょっと肌寒いけれど、爽やかな秋晴れになりそうである。こんな良い天気の日に切った張ったをしなければならぬなんて、面倒だと思わないこともない。

「良い天気ね。昨晚は綺麗な満月だったし」

「あ、見たんだ」

「見ていたわ。貴方も？」

「ああ」

「貴方ってさっぱりしているのか、情緒的なのかよくわからない人ね」

「そんなことはないぞ。極力、情緒的なことは言わないようにしているだけで、小説とか音楽とか好きなんでね」

「へえ……なんか面白いわね。本とか書いたら意外と売れるかもしれないわよ」

「それは老後にとっておこうって考えているんだ」

「ふふふ、そうなの。まあ、私の魔法が生きる天候ね」

「……のんびりしたいなあ」

「時間強盗と話すんじゃないの？」

「もちろん話す」

「ふふふ」

何が面白いのかよくわからないけれど、手で口元を隠しながら彼女は笑っている。

時間強盗の方から俺に話しかけてくれたら良いのに。

「貴方、調子は良さそうね」

「おう、全開だけれど」

「そう。それじゃあ、ちょっとだけ魔術を教えようかしら。即席でも使えないよりもマシなものもあるし」

「本当か？ もう教えてくれるのか？」

「ええ、あまり疲れない程度にね」

そう言った後にスープを飲み終わったみたいで、二人で席を立つ。

「よっしゃあ！ これで俺も魔術師だ！」

控えめにガッツポーズを取る。

「才能はあると思っているけど、名乗れるほどになるかは貴方次第ね。十時半に昨日の公園の時計の下で待ち合わせしましょう。あ、道がわからないかしら……？」

「ああ、いや、多分、大丈夫だ。この町はあんまり高い建物もないし、大体わかっている」

「そ。じゃあ、そういうことね。十時半よ。時間厳守ね！」

\*

公園にある時計を見る。五分前に公園に着いた。平日ということもあり、犬の散歩をしている人がちらほらいるくらいで、人はあまりいない。こうなると魔術を学ぶ為にはもってこいの環境だ。でも、そもそも、俺が使える魔術はそんなに派手なものじゃないだろう。

白と緑だ。

基本的に赤は外的要因によって攻撃することを得意としていて、青は赤の反属性で、外的要因から身を守ることを得意としているもの。同じように黒と白が対の属性になっていて、黒が内的要因から攻撃することを得意としているもの、白が内的要因から身を守ることを得意としているものである。そして緑の魔法だけが反属性や対になっているものがない魔法で、命を生み出すことを得意としているものなのである。

つまるところ、白は黒から身を守る為にあるようなものなんだろう。修行の形としてはミリーが黒の魔術を使って攻撃して、俺がそれを白の魔術を使って防御するという形になるんだろう。

時計の方を見ながらそういったことを考えていると、ミリーが三分前に外套を着てやってきた。

「ちゃんと時間を守れたわね。合格よ」

「ありがとーございます」

棒読みで言う。そんなにルーズな方じゃないんだぞ。

「……何か引っかけか、まあいいわ。時間の無駄ね。さあ、練習を始めましょう」

「よっしゃあ！ 修行開始！」

「じゃあ、まず、いきなりだけど、精神抵抗系属性から始めるわ」

「精神抵抗系属性……」

「そう。まあ、簡単に言うと、常に平常心でいることができるようになるろうという魔術のことね」

「ふむ」

「この魔術が使えないとね、いくら他の強い魔術を使うことができたとしても、魔術師同士の殺し合いで勝つことはほとんどできないわ。昨日は私の魔眼を魔眼で封じたけど、精神抵抗系属性の魔術が使えるばそれを使うまでもないの」

ああ。

「面白いじゃないの……！ 貴方もどうやら魔眼持ちみたいね。魔力を以て魔眼と視力を封じる簡単なものみたいだけれど、その魔眼は対人で一番役に立つわ。私もやればできる。オーソドックスだけど、なければ魔術師は名乗れないものよ」

とか言っていたやつか……。

「先生、質問があります！」

挙手して言う。

「何かしら一君？」

腕を下ろす。

「俺の持っている魔眼って何色の魔術になるんですか？」

「そうね……面倒だけど、それは調べておいた方が良いわね」

そう言うと、彼女はこっちを見つめてきた。

「この状態のまま、魔眼を使いなさい。できれば手加減してね。魔法解析系属性の魔術があつてね、これは基本的に貴方が得意な白の属性なんだけど、一定の行動を取られると何色の魔術なのかわかるわ。あの時、私がもうちょっと気を張っていたら、わざわざ私がもう一度魔眼を使われなくても、魔術なのか超能力なのかはっきりとわかったんだけど、申し訳ないわね……」

「いやいや……」

「ちゃっちゃとやっちゃいましょう。良いわよ」

「やるぞ！」

イメージするのは虹色のトンネルだ。

その時間と掴みとれ。

この先の向こうへ――

「くっ！ わかった！ ストップ！」

その声に反応して、気を緩める。

「はあ……どうやら、あなたのその魔眼は超能力みたいね。魔術の色は認識することができなかつたわ。それにしても結構強力ね……」

「上手く手加減ができなかつた。すまん」

「まあ、威力がなくてコントロールできるのと、威力があつてコントロールできない人間のどちらが今必要かと言われたら、後者なの。気にしないで」

「……相手は世界最大の懸賞首なんだもんな」

「そういうこと。でも、その程度の超能力の魔眼は珍しくないけど、貴方、どうも異常なくらいのポテンシャルを備えているみたい」

「なんでだ？」

「いくつもの超能力を持っている人間はそれほど珍しくないけど、その質によって数が決まっていると言っても過言じゃないはずなの。それは魔術の才能を足しても同じね。そしてこの星に生きている全ての生命に言えるはずなのよ。完全に証明されていないけど、ほら、人間ってみんな同じくらいの才能を持っている、みたいなことを学生の頃に話さなかつたかしら？」

「ああ、話したことある」

「そういうことなの。科学で証明されていない神秘におけるそれは完全に証明されていないけど、もう原理のように当たり前話されているわ。そうね、自分で言うのもあれだけど、私だって異常な部類に入る。時間強盗だって同じね。そして……」

「俺もそうだってことか」

「そ。だから、貴方はまだどこか自信なさそうに見えるけど、もうちょっと自信を持って良いわ

」

「そんなことはないけれど」

「いいえ、私には魔術が使えるようになってから逆に自信がなくなったように見えるわよ。貴方の超能力は使いどころさえ間違えなければとんでもなく強いんだから、自信を持って」

「……わかった」

見透かされているなあ……。口先だけでも否定したかったんで、そうしたけれど……。

「そうねえ……やっぱり、まずは魔法解析系属性、精神抵抗系属性、あとは身体強化系属性かな……」

\*

---

「あ、先生」

「はい、一君、何？」

「もう魔法解析系属性は使えるかも」

「……何ですって？」

「……あ、いや、そんな気がするだけかもしれませんが」

「良いわ、じゃあ、今から使う魔眼が黒の魔術か超能力か当ててみて」

彼女の瞳を見つめる。

——その瞬間、絶望を見た気がした。

何をやってもできないような感覚。

どうあがいてもどうにもならないような感覚。

死ね、早く死ね、と心の中で自分が呟いている。

死ね。

そんな意識の中のどこかで、真っ黒なイメージを感じる。

どんなことがあったとしても、覚えている必要がある感覚は二つだけ。

イメージするのは常に虹色のトンネルだ。

そしてその時間を掴みとる。

この先の向こうへ——

「っ！ もう、早く精神抵抗系属性の魔術を覚えなさい。いちいち魔眼封じされていたら、こっちが疲れるわ」

「……面目ない」

「で、どっち？」

「黒の魔術だ」

「そう？ ちなみに、見るだけで生命を殺すっていう超能力の魔眼もあるの。推測だけで言っていたら意味ないけど」

「……そんなものも！ いや、魔眼に陥った時に、確かに黒いイメージが浮かんだ」

「……正解よ」

「よっしゃああ！」

ガッツポーズをとる。

「まあ、これで魔法解析系属性の魔術は合格ね。これからどんどん使っていけば、成長する魔術

は成長するし、しない魔術はしないわ。そういうものなの」

「わかった！」

「ちなみに今の魔術は精神操作系属性の中でも、とびきり凶悪な自殺させる魔術ね。魔術師や魔法使いじゃなければ誰にも他殺だと認識できないわ」

「……簡単に完全犯罪ができてしまうのか」

「そういうこと。死ななくて良かったわね」

「死ぬなんて思っていなかっただろ」

「もちろん」

そう言って、彼女は無邪気に笑った。

「次は何だ？」

「そうね、精神抵抗系属性になるけど、これは結構きついわ。覚悟は良いかしら？」

「当たり前だ」

「頼もしいわね」

「からかってんのか」

\*

誰にだって一つや二つは人に話せないことがあるだろう。話しても構わないけれど、話すと場の空気が重くなってしまふということが起きたり、自分のアイデンティティがそうすることによって崩れてしまったり、他にも自分のプライドがこんなことを話すなんて許さないということもあるんじゃないだろうか。そして、それが同時に自分の過去であるということもそう少なくはないんじゃないだろうか。むしろ、他人に話すことができない話というところを思い浮かべる人が大半なんじゃないだろうか。他人の秘密よりも、大抵の人が自分の秘密の方が大切だと思っている。

だからと言ってそれを非難するつもりは全くない。その時の場の空気を読むことはとても大事なことだと思っているし、アイデンティティが崩壊して人格が壊れてしまうなんてことを歓迎していないし、プライドを守ることだってとても大切なことであると思っている。そういうことを言いたいんじゃない。語りたくないじゃない。俺が自分の過去をなるべく他人に話さない理由は話したところで何にもならないからである。今まで起きたことからまるで影響を受けていないかと言われるとそんなことはないだろうけれど、そこまで大して気にしていないし、話したところで今の俺がどうにかなる訳じゃないからである。つまり、自分の為に自分のことを語るといことはこれからもないと言っても過言じゃないだろう。

でも、この世界には魔術師や魔法使いと呼ばれる他人の過去の記憶を盗み見ることができる存在がいる。そいつらと戦うということになると、過去の記憶を利用して平常心を揺さぶろうとしてくるのである。そいつらが過去の記憶を読むことができるかどうかは厳密には関係ない。読めなくても悪夢を見せることができるらしいのである。

どういうことか、という。

最大の白の魔術は自分の持ち得る最悪のイメージとの戦いなのである。

逆に言えば。

最大の白の魔術は自分の持ち得る最高のイメージを保つことなのである。

ミリーの端的で簡潔な説明とは異なる俺の説明をすると、こういうことになるだろう。

要領はわからないこともない。自分の確固たるイメージを持てば良いのである。でも、それがもの凄く辛いことであるということだ。

ちなみに魔術を使う時のイメージとはまた別のものであるらしい。まずは魔術を使う工程を踏んでから、自分の確固たるイメージを維持するのである。

「一応、貴方に聞いておきたいんだけど、何か苦手なものってある？ もちろん食べ物なんかじゃなくて、命を脅かされるほどの危険な体験とかしたことあるかしら？」

「うーん……」

「言えないなら無理に言わなくても良いわ。ただ、さっきも言った通り、その危険な体験などの恐怖がこれから立ち向かわないといけないものなの」

「いや、言えないんじゃないくてさ……」

「……もしかして、そういう経験がないの？」

「ああ、ないんだ」

「……流石シビリアンね。貴方にはこっちの世界は向いていないんじゃないかしら……」

「向いている、向いていないじゃないだろ。それしかないなら、やるだけだ」

「……へえ、カッコいいこと言うじゃない。それじゃあ、ちょっとどういう悪夢を見るかわからないけど、やるわよ」

「おう」

ミリーがこっちを見つめてくる。

\*

あれ、悪夢を見ているはずなのに、ミリーがこっちを見つめたまま、何も起こらない。おかしいな……あ、ミリーがこっちに右手を向けた。

——まさか。

間違いない。昨日の火炎とレーザーを無意識に恐れていたんだろう。

ミリーの右腕から強力な爆炎が放たれた。

一瞬で感覚がなくなった。熱いとか痛いとかもう通り越してしまっただけで、両手を顔の側へと近づけて見ると、真っ黒になった手が爆炎によってちよつとずつ消滅していく。

「あ、ああああっ！」

落ち着け。こんなにリアリティがあるなんて思わなかったけれど、落ち着くんだ。これは魔術だとミリーに散々と念を押されたじゃないか。

それにしても、ちよつとずつ熱くなってきた。それはまるで死期を知らせるかのように体の消滅と比例して酷くなっていく。

イメージするのは常に虹色のトンネルだ。

そしてその時間を掴みとる。

この先の向こうへ——

——保つのは最高の自分のイメージだ。

「はっ！」

「ちよつと早かったかしら……？」

そう言ってミリーは心配そうな顔をしてこちらを見つめている。

「いや、大丈夫……」

両手を地面に着いて座り込んだ。あ、熱いと思っていたけれど、汗だくだったのか……。

「ちなみに、どんな幻覚が見えたのか教えてくれないかしら？」

「あ、えっと……ミリーが俺に向かって強烈な赤魔術を使ったものだった。爆炎で体が真っ黒になって、消滅していくという……」

「ふふ、どうやら昨日の魔術が一番のトラウマになっているみたいね」

笑ってはいるけれど、表情は心配そうなままだ。

「そうだな」

そう言うと、ミリーの表情は厳しいものになった。

「私は貴方に過去の悪夢を再体験するという黒魔術を使ったの。でも、貴方にはそれらしいものはないみたいだから、身近な死の体感になってしまったみたいね」

「黒魔術ってそういうものもあるのか……？」

「あるわよ。ちなみに、自分の指先をよくご覧なさい」

「え？ ああ」

その通りにすると、両手の指先が火傷をしたかのように赤く腫れている。

「……これは！」

ミリーが近づいてきて、そっと俺のそれぞれの両手の指先を、それぞれの両手で握った。

「これは科学的に証明されている話なんだけど、脳が火傷をしていると思ったら、本当に火傷をしてしまうということは知っているかしら？」

「……ああ、もちろん」

「黒魔術はそうやって生き物の命を奪うことができるの」

彼女の手が指先から離れると、火傷は完治していた。

「おお……」

「悪い話なんだけどね、この手の魔術も時間強盗は得意なの。あなたの白魔術に対する才能はかなりあるはずだから、きっとなんとかなると思っているんだけど……」

「なんとかなるぞ！ 今のやつでコツは掴んだ！」

「ふふっ、本当に？ まあいいわ」

おっ、良い笑顔だ。

「じゃあ、精神抵抗系属性も合格ね」

「よし、じゃあ――」

「そうね、あとは身体強化系属性のみ。これは本当にどうなるか楽しみだわ……！」

## 第四章

---

東の山にある時計塔に着いた。遠くから見るとそんなに大きくないと思っていたんだけど、近くで見るとなかなか立派で、年季の入っている建物である。ここまではなるべく目立たないように来たんだけど、

「貴方はまだ魔力を消すなんて芸当はできないから、最終的には堂々とするわよ」

と言われてしまって、ミリーの後をひよこひよここと着いて行っている。

「時間まで後二十分ね……」

「ああ」

「昨日の作戦は覚えているわよね……？」

「あの程度の簡単な作戦を覚えられない訳ないだろ」

時計塔の中に入り、螺旋階段を登っていく。

へえ、と中の構造に驚くと、

「こんなものでしょう。時間を知らせるとのこと以外の機能を持っていないのね」

と、ミリーは冷静だった。

階段を登り切ると、そこにはむき出しになっている時計仕掛けのある部屋だった。

「意外と高かったわね、この建物」

「おお！ 本当だ！ 凄く良い眺めだ！」

大きくてガラスもない窓から外を覗く。

「貴方ね……堂々とするって言ったけど、そこまで……でも、綺麗ね」

「だろ！」

あんまり大きくないこの町を見渡すことができるのである。

この町も歴史があるんだろうな……。こんなに街並みが良い感じだ。

「あと一分よ」

その言葉を聞いて、身が引き締まった。

室内へと視線を戻す。

「来るのか……？」

「ええ、来るわ」

「来るんだな……」

ついにやって来るんだ。一年以上も追いかけて、もう出会うことは無理かもしれないと何度も思っていたのに、ついにこうやって相まみえることができるんだ。

泥棒をしていて世界の賞金首だということは知っている。悪いやつなんだろう。でも、彼には彼なりの理由があるのかもしれない。

「来る！」

ゴーン、ゴーン、と鐘が鳴った。

光の速度を超えろ。そして、その時間を掴みとれ。

世界が無音になった。

そして、静かに、もう一人の人間がこの部屋に入って来た。

青い外套を羽織っていて、青い服を着ている青年だ。

——時間強盗。

「おやおや、やっぱり先客がいたか……活火山のミリー……喧嘩したくない相手だな……」

まだこいつの一挙一動に反応してはいけない。

「でも、珍しいな……活火山のミリーはつまらないことでも有名だったはずだが……まあ、どうでも良いことだ。この時計塔が起こしている奇跡の真実に比べたらな……」

時間強盗はこっちに背を向けた。

——今だ！

レーザー銃を撃つ。

時間強盗の外套が一瞬だけ球体のバリヤのようになり、レーザーを弾いた。

「へえ……この世界に介入することができるやつだったか。名前を聞いてやる」

「一だ」

「もしかして、漢字の一を書くのか？」

「それがどうかしたのか？」

「俺の本名は割と有名なんだが……知らないか？ オサムって言うんだ。一と書いてな」

また共通点が増えた。ジョニー・アップルシード系だということは知っていたけれど、そこまでは知らなかった。

「どうでも良いな。どんな超能力を持っているのか知らないが、まるで洗練されていないその魔力からするに、ルーキーだろう」

「くっ……！」

全然相手にされていないっ……！

「銃を下ろせ。俺の首が目的か？」

「……いや」

ミリーには悪いけれど、このままちよっと話してみよう。

銃を下ろす。

「あんたに聞きたいことがあるんだ」

「良いだろう。少しだけ聞いてやる」

\*

---

「……どうしてそんなことをしているんだ？」

「それはどうしてこの時計塔にいるのかという質問じゃなくて――」

「ああ、どうしてそんなに凄い超能力があるのに、泥棒なんてやっているんだ」

「……そうだなあ。これは初対面の相手なんぞに話したくないんだが、この世界に入門できた記念に、特別に少しだけ語ってやろう。俺の目的は泥棒じゃない。正確に言えば世界をより良くする為に泥棒をしているだけだ」

「世界を……より良くする？」

「そうだ。この世界の現実をお前がどれくらい知っているのか知らないが、人間以外の上位種族の置かれている状況は酷いものだ。俺はそれを――俺なりの方法で改善しようとしているだけだ」

「なっ……！」

「もちろん、その為なら邪魔をするやつは皆殺しにして来た。一人殺せば犯罪者だが、千人殺せば英雄だ。俺も今、その道を突き進んでいるということだ」

「……」

「それで、お前はこんなところでどんなことにその超能力を使うつもりなんだ……？」

「……それはっ……」

「ちなみに、お前でこの世界に介入できた人間は五人目だ」

……五人目！

「なっ、時間を止められる能力を持っているのはあんただけだと……」

「世間一般じゃそう言われているな」

五人もこんな超能力を持っている人が……！

「だから、珍しいと言えば珍しいが、それほど驚くことじゃない。二番目にこの世界に入門したのが俺なんでね。全然驚かないぜ」

「この世界をより良くする為……」

「馬鹿みたいに繰り返すなあ。それがどうかしたのか？」

「はっ、答えているんだよ！ 俺もこの世界をより良くする為に、この超能力を使う」

「そうかそうか。俺と手を組むか？」

「――いや、世界をより良くする為に、お前を捕まえる！」

\*

「ああ、その意気込みは買ってやる。だが、ちょっとだけブレイクしないか？ 本当に面白いものが見えるぞ」

「……面白いもの？」

「ちょっと外を見てみる」

素直に外を見てみる。

そこには明らかに昔の街並みが広がっていて、その時代らしい服装をした人々が町を歩いている。

「……これは？」

「なっ、おもしれーだろ」

「あっ、ああ——」

「この時計塔はな、ある一人の男が一生を懸けて造ったものなんだ。そしてこの日のちょうど午後十二時前に、その男は死んだ。それをこの塔が嘆いているんだよ。どっちかというとなんか黙って祈りたいなもんか。こうやって、この場所で死んだ爺さんが生きていた頃の世界を再現しているんだ」

「へえ……」

「この世界は無機質な命だっけ溢れている。そいつらも自分の目的を持って生きていたりするんだよな。この時計塔はこの町の人間たちに時間を示し続けるだけでなく、感謝の気持ちを表して黙って祈らせる。お前には——本当に俺を捕まえるだけの目的があるか？」

「……今は弱いものかもしれない。だけれど——」

「ほう」

「とにかく、あんたの考え方は気に食わない。お前は俺が捕まえる！」

イメージするのは常に虹色のトンネルだ。

そしてその時間を掴みとる。

この先の向こうへ——

「ファーストプロテイン！」

緑の魔術を詠唱する。

肉体を活性化するもので、身体能力が格段に向上する——

「危ないな——」

レーザー銃を乱射する。

時間強盗はそのレーザーの合間を縫って時計塔から飛び降りた。

「くそっ、逃げられる——」

急いで窓の外へと飛んだ。

時間強盗はふわふわと落ちている。どうやら俺が飛んで降りてくるといっていいんじゃないかと思っただけだ。

「信じられん……！」

落下しながらレーザー銃を撃つ。

さっきのように外套がぐるりとバリヤのようになって、時間強盗を包み込んで、レーザーを弾く。

それなら、これでもくらえ。

「おおおおっ！」

外套のバリヤごとぶん殴る。落下の勢いを含めて、思いっきりだ。

ドン、という轟音と共に、地面が十数メートルほどの直径の円の形にめり込んだ。

「一君！」

ミリーの声が上から聞こえる。

空を見上げてみると、ミリーが魔方陣を背にして、飛んで落下して来ている。

「離れなさい！」

その一言と同時に彼女の掌から爆炎が発射された。

急いで二十メートルほど飛び退く。

時間強盗が外套のバリヤごと燃え上がる。

「やった！」

「これからが本番よ！」

ミリーが声を荒らげた。

\*

---

街並みは現代のものに戻っていた。

スタッとミリーは着地した。

「作戦はうまくいったわね」

「ああ、なんとか……」

作戦というのは時間を止められる度に、同時に時間を止めて、とにかく時間強盗の気を逸らす為の一撃を入れるというものだった。時間を止め合えば、お互いだけが動くことのできる世界になるだろうとミリーは踏んでいたのである。たとえ時間強盗と言っても、何をされてもずっと時間を止めていることができる訳じゃないはずである、ということだった。

「ふははは！」

豪火の中から不敵な笑いが聞こえてくる。

「これだけのピンチは初めてだ」

そう聞こえた後に、豪火がこっちへと一瞬で燃え広がってきた。

イメージするのは常に虹色のトンネルだ。

そしてその時間を掴みとる。

この先の向こうへ――

――保つのは最高の自分のイメージだ。

豪火が消えて、外套のバリヤの中から時間強盗が無傷で出てきた。

「活火山の方は無理だろうが、そっちは焼け死んでもおかしくないんだがな……」

また一瞬で体が燃え上がる！

イメージするのは常に虹色のトンネルだ。

そしてその時間を掴みとる。

この先の向こうへ――

――保つのは最高の自分のイメージだ。

「はっ、どうやら無駄みたいだな」

「そうでもないぞ？」

いつの間にかミリーが止まっている。

「しまった……！」

「白魔術を継続的に使うのはまだ無理みたいだな」

「くそっ」

どうにかして強烈な一撃を叩き込まないと！

走って腹を殴りつける。

非常にシンプルな一撃だったけれど、それがクリーンヒットした。

「ぐっ……！」

あれっ？

時間強盗が苦しんでいるのがわかる。

そうか、あの外套はレーザー銃にしか反応しないんじゃないか！

後ろからレーザーが飛んできた。外套は一瞬で反応して、バリヤとなる。

「ミリー！」

後方にいるんだろう、ミリーに声をかける。

「何？」

「あいつのバリヤは俺自身の攻撃に反応できないみたいだ」

「それは朗報ね！ 接近戦はまかせるわよ！」

それなら、レーザーソードを使わせてもらう！

ポケットからレーザーソードを取り出す。すると、そのレーザーソードが爆発した。

イメージするのは常に虹色のトンネルだ。

そしてその時間を掴みとる。

この先の向こうへ――

――保つのは最高の自分のイメージだ。

「こっちも、同じものを使わせてもらう……」

「上等だ！」

でも、ファーストプロテインまで使っている俺に速さで敵うはずがない。

一刀両断だ。

いや、これは本物じゃない。幻――

「一君！ それは青魔術よ！」

ちょっと後方へ飛んでいた時間強盗にミリーのレーザーが襲いかかるけれど、また外套に弾かれる。

あの外套にどれだけレーザーソードが効くか――

「おおおっ！」

全身全霊を込めて、一刀する。

手応えは全くないまま空を斬った。

「ちっ！」

また幻を斬ってしまった。

「どうした？ その程度か？」

時間強盗の一刀が来たんで、それを受け止める。

――軽い！

「こっちのセリフだ！」

受け流して斬ったんだけど、それも幻だった。

「くそっ……」

後方からレーザーが飛んで来る。

「一君！ あれは因果律に、つまり、貴方の攻撃を受けたことをなかったことにしている魔術なの！」

時間強盗はまた外套のバリヤに包まれ、それがレーザーを弾く。

「私も接近させてもらうわ！ 二人ならどうかしら？」

ミリーが真っ赤なレーザーソードのようなものを手から出現させる。

「活火山……」

時間強盗は眩く。

ミリーも魔術で出現させた剣で斬る。

それはやはり幻で――

「今だ！」

次に姿を現した瞬間に斬りつける。

ビーンとレーザーソード同士が強くぶつかる。

「くっ……！」

時間強盗がひるんだ！

「ミリー！」

「わかって……なっ！」

見慣れない男が時間強盗に剣を斬りつけようとしていた。

\*

---

ミリーは時計塔に向かう際にある異変に気づいていた。自分たちをつけて来ている人間がいるのである。しかし、それはいつものことだった。ミリーが満身創痍となったところで、殺されたくなかったら手柄をよこせ、と言ってくるのが常だった。そのような脅しに屈していないからこそその大魔術師の称号を持っているのであるが。

しかし、この男は自分から手柄を取りにやってきた。もちろん、確かに自分たちを利用していることは間違いなかったのであるが、その勇気は本物だった。

魔力量も一般人のレベルを超えないし、放置していても問題ないだろう、とさっきまで踏んでいたのであるが、数々の場数を踏んできたミリーである。デス・ソードの存在に気がついた。

それは時間強盗も同じだった。

しかし――

「一般人が踏み込んで良い領域じゃねえぞ」

デス・ソードは時間強盗じゃなくて、その男の首を貫いた。

男は時間強盗の側まで来て、自害してしまったのである。

時間強盗の漆黒の瞳には黒魔術が秘められていた――

\*

---

「うっ、うわああああ！」

「落ち着いて一君！」

「こいつは助かったぜ」

ミリーが時間強盗を斬りつけようとしたけれど、大きく距離を取られた。

落ち着け。何も起きていない。魔術的なことは何もない。

けれど――

今までのどんな幻覚よりもリアルだった。当たり前だ。本当の出来事なのである。本物の出来事なのである。今、ここで時間強盗に一人殺されたんだ。

時間――強盗！

「やっぱり、お前は間違っている！」

「落ち着きなさいって一君！」

ミリーには最終手段にしろ、と言われていたけれど、自分の心の奥底の方から迸ってくる怒りはこうでもしないと抑え切れない。

イメージするのは常に虹色のトンネルだ。

そしてその時間を掴みとる。

この先の向こうへ――

「グロウ！」

緑の魔術を詠唱する。

身長が十倍になる。これは体を巨大化させる魔術だ。

「へえ……面白いな……普通は正義の味方が後から巨大化するもんだが」

時間強盗は未だに不敵な笑みを浮かべている。

「体だけが大きくなれば良いと思っているその思考回路を、叩き直してやらないといけないな」

やってやろうじゃねえか！

こうなるとリーチは考えなくても構わない。逆に攻撃を当てるのが難しくなるんだけど、時間を止めるだけじゃなくて、光と同じ速さまでの移動がもともとできるのである。その上に肉体の活性化（ファーストプロテイン）がまだ効いている。

「デカいからって遅いと思うのは大間違いだぞ！」

地面の方向にいる時間強盗へ向かって右手の突きを放つ。

「あのなあ、ルーキー？ お前が使えて俺が使えない訳がないんだが、この際だから力の差ってやつを見せてやる」

突きが途中で止まり、右手がひんやりとしてくる。

「なっ……！」

右手が凍っていく！

「時間強盗さん、彼一人ならそれも強力だけれどね」

熱いっ！ 凍っていった右手が解凍される。

「あなたほどの畏怖は持たれていないとしても、私だって大魔術師の活火山とまで呼ばれているミリーよ。その手は効かないわ」

ミリーの周りに炎の渦が出来上がっている。

それに対抗するように、時間強盗の周りには水が渦を巻いている。

「あれは……青魔術？」

魔法解析系属性の魔術で工程を使わなくてもわかった。

成長しているんだ……！

「そうよ！ 外的要因とか内的要因というのはあくまでも基本の話！」

そう言ってミリーは空中に大きな火の玉を作った。時間強盗も負けずと水の玉を作り上げる。そして両方が弾丸のように撃ち出され、巨大な熱気と水蒸気だけが残った。

——今だ！

光の速度を超えろ。そして、その時間を掴みとれ。

「くらえ！ 時間強盗！」

こっちから時間を止めて、今度は左手の突きを放つ。

「残念だったな。だが、これからが楽しみだ……」

なっ……時間を止める余裕なんてなかったはずなのに！

左手からパキパキと凍っていく。

「簡単なことだ。俺は時間を同時に止めなくても、時間を止められている世界でも意識があつてな、その時に念じれば、こうやって誰かが時間を止めている世界でも活動をすることができるんだよ」

「そっ、んなっ！」

体の芯まで凍っていくのがわかる。このままじゃ凍死してしまう。

「才能の芽は早めに摘みとっておかないとな……」

くそっ、くそっ、くそっ、くそうっ！

完全に俺の判断ミスだ。相手の力をみくびっていた。

時間強盗が話しかけてくる。

「死ぬまで時間を止め続けなければいけないんだけどな、これが意外としんどいんだ。まあ、ここにデス・ソードがあるからこれでやっちまえばすぐなんだが——」

デス・ソード……？

「まあいいだろう。さあ、これでもお前は俺を捕まえるつもりか？」

「捕まえてやる！ お前は俺が捕まえる！」

\*

---

この状況で、即答だった。

彼は自分を捕まえようとしている人間と何人も対峙してきたが、動機はそれこそ何通りもあった。懸賞金目当て、国家機関、復讐、盗まれたものを取り返す為、本当に色々な理由を持って、色々な人々が彼を捕まえに来た。

しかし——初めてだったのである。

昔の自分には自信がないこともあった。自分がやっていることは本当に正しいのだろうか、この方法を取ることが本当に良いことなんだろうか、と何度も迷っていた。だが、現に自分はここまでの成功を収めているのである。国を一つ潰すくらいのはやってのけられるだろう。

最近になってから迷うことはなくなっていた。

だがしかし——それでも、こいつは言ったのである。

「——いや、世界をより良くする為に、お前を捕まえる！」

「とにかく、あんたの考え方は気に食わない。お前は俺が捕まえる！」

「やっぱり、お前は間違っている！」

そう、彼はそう強く言ったのだった。

今更、彼の考えが変わることもないだろう。しかし——

\*

「まったく、無茶してくれるんだから……どうしてついさっき覚えたばかりの魔術なんかであそこまでやろうとするのかしら……それだけ頭に血が登ったというところだろうけどね」

……。

「大体、いくらポテンシャルがあるって言っても、全然経験がないんだから、自分で仕留めようなんて思わないで欲しいわね。相手は世界一強いかもしれない人間なのよ！ まったく……」

——ん？

「はあ、これからどうしようかなあ……この子といると世話がかかりそう」

なんだ？

ああ、ミリーが俺の体の近くに来て、治療をしてくれているみたいだ。

「ミ、リー……」

「あ、気づいたのね。まだ目は開けられない？」

「……完全に無理」

「そうでしょうね……。貴方、自分がどういう状況だったかわかっているかしら？」

「いや……時間強盗は……？」

「もういないわ。逃げられたの。勝てない勝負はやらない主義だから、本当は今日も偵察のつもりだったんだけど、貴方というジョーカーを引いてしまったばかりに、賞金に目が眩んじやったわね……」

一体何を言っているんだろう。

「どういうこと……？」

「これでも私は世界の賞金稼ぎなの。今まで獲得してきた賞金の額は一番なのよ。それってつまりね、一番の賞金稼ぎが、一番の賞金首に負けたということよね……」

——ああ、そういうことか……。

「ミリーに汚名を付けちまったんだな。すまない」

「それ自体は別に構わないんだけどね、そうすると世の中が不安定になるの。私はそれが不安でたまらないわ……」

「……本当にすまない」

「……はあ、こればかりは私に謝ったってしょうがないじゃない。そうね、貴方が時間強盗を捕まえてくれれば良いわ」

「——ああ、あいつは俺が、必ず捕まえるから」

「え……？」

ん……？

「今、俺って変なこと言ったか？」

「いいえ、そんなことないわよ。それより、貴方、喋るのもやっとなでしょう。しばらくは安静にしていなさい。これからちよっと面倒なことになるけど、いいわ、私が助けてあげる」

今は何がどうなっているのかまるでわからないんで、とりあえずまかせることにして。ミリーには本当に助けられっぱなしだ。どんな形でも良いから、恩返ししないといけないや。



## 第五章

---

いつからだったか全然思い出せないけれど、物心がついた時には誰かが現実に苦しんでいる姿を直視することができなかった。痛いのも、苦しいのも、見ていてとにかく辛かった。貧困などを取り挙げたドキュメンタリーのテレビ番組なんて好んで見る人がいるということが信じられなかった。自分がこんなにも幸福であるということが許せなくなってしまうのである。

でも、『光の速度で動ける』ことや『時間を止める』ということができるとわかるようになったんで、自分が幸福であるということを許せなくなってしまうことはなくなった。それもそうだろう。だって、自分が化け物のような能力を持ったことによって、幸福じゃなくなってしまったのである。その代わりに、多くの人々を助けることができるようになったんだけど。

不幸になった、という感覚はまだない。超能力に気づいてからも俺は多くのものに恵まれていた。多くの人々に助けられて、ここまでやってきた。

けれど——あいつは違うんじゃないだろうか。

——はて、どうしてこんなことを考えているんだろう。

微睡眠の中で、よくわからない思考をしている——

ピピピピッとベッドに付いているアラームが鳴っている。カチカチ、と二回ボタンを押してアラームを止めて、緩慢な動作で起き上がる。クローゼットに入っている強化服を着て、顔を洗って歯を磨いて、部屋から出て部屋の鍵を閉めて、食堂へと向かう。食堂の前に着くとチェックのシャツにジーンズというカジュアルな服装をしたブロンドの女性がいた。

すたすたと近づいていくと、向こうが俺に気づいて、声を掛けてきた。

「早いじゃない。約束の時間まで十分もあるわ」

「……おはよう」

「あら、ごめんなさい、おはよう、一」

「早いのはそっちだよ。いつから待っているんだよ」

「ついさっきからよ。そんな細かいことを気にしていたら、ハゲちゃうわ」

「……早く栄養を補給しよう」

「それが良いみたいね」

ミリーは呆れたように笑っていた。

朝食は豪華なバイキングなんで、ミリーに言われたものと自分の好きなものを取ってきて、並べて食べる。腹が減っているからがつついて食べる。

「……貴方、本当によく食べるわね」

「ん？ そうか？」

「ええ、そうよ。太らないの？」

「見ての通りだ」

肉付きは悪くないだろうけれど、太っているということはないだろう。

「ああ、羨ましいわ……」

「……なあ、ミリー」

「何かしら？」

「俺は結局のところ、これからどうなるんだ？」

がつついて食べながら質問する。

「喋るか食べるかどっちかにするべきだけど、まあ、いいわ」

「俺は食べながら聞くから、話してくれ」

「私が食べられないでしょう！ いいわ……貴方の不法入国に対する罪は特に問われないわ。

私が……まあ、どれだけなのかは言わないけど、お金を払っておいたから」

「えっ……」

ミリーに借金しちまったのか……！

「それは気にしないで。それでね、貴方はこれからアメリに強制送還されることになったの。着の身着のまま来たみたいだし、荷物もないでしょうから、これから迎えに来る軍人と一緒に行きなさい」

「そっかー」

うーん、まあ、そうなるよなあ……。

「で、私も着いて行くことにしたわ」

「え？」

「貴方の旅に同行することにしたの」

「……本当に？」

「……もしかして、自分が時間強盗を捕まえてやると言っていたのは嘘だったのかしら？」

「そんな訳ないだろ」

「私もそれを手伝うって言っているの！ もう、嫌なら行かないけど」

「そんな訳ないだろ！ 一緒に来てくれ！」

両手をテーブルにつけて、おじぎをする。

「……わかったから、そんなみつももないことはやめて」

「はい」

やめる。そして、続けて言う。

「ところで、何で？」

「貴方と一緒にいた方が儲かると思ったの」

「そういうことか……」

でも、理由がわからないより、もの凄くマシだ。

昨日は二度目に目を覚ました時は既にこのホテルのベッドの中だった。明日の午前九時に食堂へ来いと言ってその場で介抱してくれていたらしいミリーはすぐに部屋を出て行った。正直なところ、もうこれでミリーと一緒に過ごす時間はないと思っていた。完全に俺のミスで逃がしたのである。愛想をつかさされてもしようがないと思ったんだけど……。

\*

二人とも食事を終えて、ミリーの荷物を取りに行き、ロビーへと向かうと、そこには一人の軍人がいた。

「あっ！」

「あら……」

ミリーと俺が声を上げると、一人の軍人が礼儀正しく挨拶をしてきた。

「あの件はお世話になりました。クリストファー・スミスと申します」

「おう！ 元気だったか？」

「はい。時間強盗と渡り合えるほど強い人だとは知らなくて……手加減して頂いてありがとうございます」

「ああ……そんなつもりはなかったんだけど……」

「ふふふ、そういうことにしておいたら？」

「ミリーは黙っていてくれ」

「嫌よ」

やってきたのは不法侵入をした時に戦った警備兵だった。

「ところで、クリストファーが送ってくれるのか？」

「クリスで良いです。そうですよ。正確にはですね……ローア帝国の軍人をやめて、僕もアメリカに行くことにしました」

「へー、これから何をするんだ？」

そう言うと、クリスは土下座をして、大声で叫ぶ。

「僕も連れて行って下さい！」

「……え？」

思わず間の抜けた声が出てしまった。

クリスは顔だけ上げてこっちを見ながら、真剣な眼差しでこっちを見つめる。

「ミリーさんの武勇伝はもちろん知っていましたが、今回の一さんの活躍の話を聞いて、僕は居ても立ってもいられなくなってしまいました」

「いや、でも、これからどうするかなんて……」

「あら？ 貴方が言っていた、世界一の賞金稼ぎになるっていう夢は嘘だったのかしら？」

ミリーはそう言ってウインクをする。

いやいや、何を言っているんだ。俺はそんなことは一言も……。

「やっぱり、流石ですね！ 超能力者は軍人にならないといけないという話ですけど、あれもアメリカだと賞金稼ぎになれば免除されるらしいですもんね！」

え……？ そうなの？

ミリーの方を見ると、小さく頷いた。

「そ、そういうことだ！」

「わー、やっぱり凄いです！ 三人で一緒に時間強盗を捕まえましょう！」

「——ああ、それだけは絶対に、やり遂げる！」

「そう決まったんだから、そんな地べたに座っていないで、早く船へ行きましょう」

「はい」

これからはまた一人になって、時間強盗と一対一でやるつもりだったんだけど、こんなにも仲間が増えるなんて思ってもみなかった。

\*

ローア帝国からアメリまでの船旅は結構長い。行きは荷物と一緒にだったのに、帰りは普通の部屋（クリスの奢り）だ。

部屋から出て船のデッキへと出て行くと、クリスがローア帝国の方を向いて潮風に当たっていた。

「あ……クリス？」

背中に声をかける。

「はい、どうかしましたか？」

クリスは振り向いた。

「ああ、いや、クリスは多分、帝国で育ったんだろ？ 故郷を離れるのが寂しいのかなって……」

「そうですね……」

なんかまずいことを聞いちゃったのかな……。

クリスは続けた。

「寂しくない、と言ったら、嘘になります。でも、一さんもミリーさんも一緒ですし、これから本当にやりたかったことをやるんです。そんな感傷に浸っている時間はありません」

「そっか……」

「ただ、帝国育ちの僕がどれだけやれるか……」

クリスはちょっと自傷気味に笑った。

「おいおい、俺なんてジパン出身のひよっ子だぞ！」

そう言って肩を組む。

「え、一さんってジパン出身なんですか……？ アメリ出身なんじゃ？」

「いや、ジパンだけれど」

「え、でも、あの町に来る船はアメリからのものだけですよ？」

「ああ、そうみたいだな。俺がジパンにいたのは義務教育が終わる十五歳の頃までだ」

「となると……一さんって何歳なんですか？」

あ、そういや――

「なあ、話は変わるけれど、何歳？」

「十七だ！」

律儀だな！ 同じ歳か！

「いや、本当に才能があるよね」

「からかっているなら、こちらからいきます」

――あの時、俺は何歳か言ってなかったっけ。

「そうそう、俺たち、同じ歳だぞ」

「——え？」

「あー、そうそう、なんか違和感があると思っていただけだけど、なんで、敬語は使わなくて良いぞ！」

「え、ええ！ いや、確かに、てつきり年上だと思っていたので、敬語だったんですけど……」  
そんなに老けていないと思っているんだけどな……。

「普通に年相応に見られることが多いんだけど、老けている？」

「え？ いや、全然そんなことないです」

「だから、敬語じゃなくて良いつて」

「いや、一さんは僕の憧れの人なので！」

「……」

いや、嬉しくないことはないんだけど、別にそんな憧れられるようなことはしていないはずだ。

急に上から目線になるよりずっと良いんだけど。

「だって、一さんって時間強盗と同じ超能力を持っているんですよね？」

「んー、完全に同じじゃないみたいだけどな」

「あ、そうなんですか。でも、時間を止められるだけでも凄いです」

褒められることは嬉しいんだけど、超能力は魔術と違って修行して覚えるものじゃないからなあ……。

「ま、いいか」

組んでいた肩を放す。

「二人とも仲が良いわね」

\*

---

ミリーもデッキにやって来た。

「お、火山だ火山！」

大きな声で言う。

「.....せめて活火山にしてくれない？ まるで物みたいな言い方じゃない」

「そうですよ。一さん、失礼です」

「悪かった」

そういえばミリーって何歳なんだろう。

聞こう。

「なあ、そういや、ミリーって何歳なんだ？」

「私？ 貴方ね、世界一の賞金稼ぎの年齢を知らないなんて恥ずかしいわよ」

「ミリーさんは十九歳です」

「え.....」

「本当なら貴方も敬語を使っても良いわね」

そ、そうだったのか。

「年下だと思っていた.....」

本当のことを口にする。

「あー、もう、自分が童顔だってことくらいわかっているわよ！」

気にしているのか.....。

「一さん、失礼です」

「ごめんなさい」

「.....宜しい」

なんなんだこの流れは。

「ところで、私には何もわからなかったけど、貴方、自分の目的は達成したのよね？」

ミリーが俺に向かって話しかけてくる。

「目的.....？」

ああ、もう完全に忘れていたけれど、俺は元々、時間強盗と話すのが目的だったんだっけ。

ミリーに言う。

「ああ、それは達成できた。最初に会った時にな」

「そう、それで、時間強盗を捕まえるつもりになった、って訳ね」

「そういうことだ」

「なるほど。でも、不思議ねえ.....」

「何が？」

「貴方、本当に何も不思議じゃないの？」

考えを巡らせる。

あ、もしかして――

「どうして俺がまだ生きているのか？」

「そういうこと」

「確かに……どうしてなんだろう……」

「私が気づいた時は既に時間強盗の姿はなくて、小さくなって氷漬けになっている貴方がいただけだったの」

「そうだったのか……」

「でも、一さんが巨大化した時は町中が大騒ぎになっていましたよ」

クリスが話に入って来て、続ける。

「ミリーさんが入国して、時間強盗が来たので、騒動が起きるだろう、って軍隊の人たちはみんな言っていましたけど、まさか、見知らぬ男が巨大化の魔術を使うなんて思ってもいなかったみたいです。僕は見た時にすぐにわかりましたけどね。あ、あの不法入国した人だ！ って……」

「そうなんだよなー、俺も犯罪者かあ……」

「これは訃報と言って良いのか、朗報と言って良いのかわかりませんが、一さんの情報は間違いなく帝国の上層部に伝えられるでしょうね……」

「あ、俺が時間を止める超能力を持っていることってバレているのかな……」

「その辺りはうまく濁しておいたから大丈夫よ。心配しないで」

ミリーが答える。

「あれ、でも、じゃあ、なんでクリスはこのことを知っているんだ？」

「それは現場に来た彼だけに私が話したからね」

——それじゃあ。

「もしかして、着いてこないかって誘ったのはミリーなのか？」

「そうなんです」

「そうなの」

二人から同じ返事が来た。

「確かに強かったもんな！」

もう一度、クリスの肩を組む。

「クリスは今の貴方が持っていないものを持っているわ。そうね、適当だけど、百人に一人くらいの逸材よ」

「……お前、そんなに凄いのか！」

「いやいや、一さんはもっと凄い逸材でしょう……」

「そうかもしれないけどね、時間を止めるなんていう規格外の能力がなければ、一君は貴方に勝てないわよ」

ハッキリとそう断言される。

「え……？」

クリスは驚いている。

「本当なのか？」

俺も詳しく聞きたくて聞き返す。

「ま、おいおいわかるわよ。二人で剣術の修行でもしてみなさい」

「よっしゃあ！ やるぞ！」

「いや、ここでは無理ですよ！」

　　そういえば、クリスに剣術でも教えてもらえないかな、なんて思ったんだった。超能力に気づいた時は本当にこれからどうなるんだろう、なんて思ったけれど——俺は今でも、幸せだ。

\*

---

真っ青な空には雲がほとんどなかった。快晴である。そのような空の下には同じように真っ青な海が広がっている。そして、青い外套を纏っている魔術師が一つの船をかなり高い空中で見送っていた。

「活火山を引き連れたか……もう一人はまだ大した脅威じゃないとはいえ、油断はできないな……」

時間強盗である。

彼はススムと名乗ったあの少年に期待していた。ここまで堕ちてしまった自分を止めることができるとしたら、きっとあのよう少年なのだろう、と。

そう思っているものの、自分が捕まるなんて状況はまだ想像することができない。

そして、止められる必要もない、という考えも変わらない。

「十中八九、賞金稼ぎになるんだろうが、そう簡単なものじゃないぞ……」

アメリでの賞金稼ぎは国家資格である。戦闘という実技も取り入れられており、試験の途中で死人が出るということでも有名だ。

「次の獲物を盗んだら、遊びに行つてやるか……」

彼の次の獲物は海の中にある。魚人たちの秘宝を狙っている。その為にはまだローア帝国から盗まないといけないものが山ほどある。

「とりあえず船だろうな」

時間強盗も再び動き出す。

「どちらが世界を変えるのか、勝負しようじゃないか」

二人の出会いはこれから大きく世界を変えるだろう。物語はここから始まる――